

鳥取県の学校教育における美術に関する地域資源の活用

- アンケート調査と聞き取り調査に基づく実態把握 -

武田信吾*

Utilization of Regional Resources of Art in Tottori Prefecture School Education
- Understanding of the Actual Condition Based on Questionnaire and Interview Surveys -

TAKEDA Shingo*

キーワード：地域資源，美術，学校教育，鳥取県

Key Words: Regional Resources, Art, School Education, Tottori Prefecture

I. 緒言

筆者は、平成 26 年度に、「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」として文部科学省が採択した鳥取大学の「知の発展的循環プロセスの構築による地域拠点整備事業」のうち、地域志向教育研究の 1 つである「地域資源を活用した美術活動による教員研修の実践研究」の研究代表者として研究事業の推進・統括にあたった¹。当該研究の目的は、鳥取の地域資源を有効に活用した美術活動で構成される教員研修の内容を確立することにより、こども達が地域の身近な美術文化と触れ合う機会を一層充実化させていくことにあった。その実現に向けて、研究事業は、(1) 地域資源を活用した教育実践についての実態調査、(2) 鳥取の美術に関する地域資源の実地調査、(3) 教材開発と教員研修の実施、の 3 つの方向性から取り組んだ。これらの内、(1) は、①鳥取の学校現場における地域資源の扱い方について、歴史的経緯や地域の実情といった観点から確認するインタビュー調査、②地域資源を活用した授業実践の取り組み状況について、鳥取県内の全体的な傾向を把握するアンケート調査、③鳥取の美術教育史において地域資源がいかに扱われてきたか、関連文献資料を収集し、情報を整理する文献調査、の 3 つの方向から進めていった。

上記の経緯により実施したアンケート調査は、鳥取県を所在地とする全ての小・中学校を対象に行ったものであるが、その結果に対しては、鳥取県下の学校現場の実情を適切に踏まえた上で考察を行う必要があると判断した。そこで、学校関係者にアンケート調査の結果をまとめたもの²を提示し、結果をどのように受け止めるか、理由をどう考えるかをヒアリングする機会を翌年度に設けた。具体的には、筆者が研究代表者として行った、平成 27 年度の鳥取大学地域貢献支援事業「地域課題研究 B（実践型）」として採択された「鳥取の美術文化に関する地域資源を活用した教材開発の実践的研究」における研究事業³の一環として、鳥取県小学校教育研究会図画工作部会及び鳥取県中学校教育研究会美術部会の役員の方の先生方に聞き取り調査を行った。

本稿は、筆者が主として行った、平成 26 年度に実施したアンケート調査と、平成 27 年度に実施した聞き取り調査に基づきながら、鳥取県の学校教育における美術文化に関する地域資源の活用状況について、実態の把握に努めた成果を報告するものである。

*鳥取大学地域学部地域教育学科

Ⅱ. アンケート調査の概要

1. 調査対象と方法

アンケート調査の対象としたのは、一般財団法人鳥取県教育関係職員互助会が編集する『平成26年度 鳥取県教育関係職員録』に記載されている国・公・私立全ての小学校と中学校である(表1参照)。回答は、小学校対象のものは校内で主に図画工作科を担当されている先生に、中学校対象のものは美術科担当教員に回答をお願いした。小学校対象のものは、校内で主に図画工作科を担当されている先生がおられない場合は、管理職の方に回答をお願いした。主として郵送によってアンケート用紙を配布し、回答していただいた後に返信していただくという方法で行った。調査期間は、平成27年1月26日～平成27年2月28日である。

表1「調査対象の内訳」

	国立	公立	私立	合計
小学校	1校	131校	0校	132校
中学校	1校	59校	3校	63校

2. 質問内容

(1) アンケート回答者についての質問

基本データとして、回答者が所属する学校の所在地と規模を把握するための項目を設定した⁴。所在地については、東部地区、中部地区、西部地区の3つの区域に分けて答えていただいた。

(2) 「鳥取の地域資源を活用した美術活動」に対するお考えについての質問

学校教育において「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実践することについて、回答者ご本人のお考えを把握することを目的とした質問項目を設定した。まず、「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実践することの必要性を感じているか否か選択肢で答えていただいた。次に、その理由を自由記述によって答えていただいた。

(3) 「鳥取の地域資源を活用した美術活動」の実践についての質問

回答者ご本人がこれまで行ってきた「鳥取の地域資源を活用した美術活動」の授業実践について把握することを目的とした質問項目を設定した。まず、回答者ご本人がこれまで学校現場において行った「鳥取の地域資源を活用した美術活動」の授業実践数はどれ位かを選択肢で答えていただいた。次に、その実践において地域資源の何を題材として扱ったのかを選択肢のなかから答えていただき、具体的に何をモチーフとして扱ったのかを自由記述によって答えていただいた。続いて、授業実践の方法について、どのような方とともに行ったのか、どのような学習活動の内容として設定したものかを選択肢で答えていただいた。最後に、これまで行ってきた授業実践のなかで、特に印象深く記憶に残っている事例について、自由記述によって答えていただいた。

(4) 教員研修についての質問

回答者ご本人がこれまで受けてきた教員研修について把握することを目的とした質問項目を設定した⁵。まず、研修内容に「鳥取の地域資源」について扱ったものがあったか否かを選択肢で答えていただき、次に、もしもあった場合は、それがどのような研修内容であったのかを自由記述によって答えていただいた。

Ⅲ. アンケート調査の結果

1. アンケート回答者についての質問に対する結果

(1) 回答者が勤務する学校の所在地（回答数と回収率）

回答者が勤務する学校の所在地は、小学校では鳥取県東部地区（所在地が鳥取市、岩美町、八頭郡の学校を指す。総数 58 校。以下、「東部」と記す）では 24 校、鳥取県中部地区（所在地が倉吉市、東伯郡の学校を指す。総数 27 校。以下、「中部」と記す）では 10 校、鳥取県西部地区（所在地が米子市、境港市、西伯郡、日野郡の学校を指す。総数 47 校。以下、「西部」と記す）では 21 校であった。中学校では、東部（総数 25 校）では 11 校、中部（総数 13 校）では 5 校、西部（総数 25 校）では 14 校であった⁶。これらの数値をアンケートの回答数に置き換え、回収率とともに示したのが表 2 である。

表 2 「アンケートの回答数と回収率」

		東部	中部	西部	全体
小学校	回答数	24	10	21	55
	回収率	41.4%	37.0%	44.7%	41.7%
中学校	回答数	11	5	14	30
	回収率	44.0%	38.5%	56%	47.6%

（※百分率は、小数点第二位以下を四捨五入し切り捨てて示している。以下同じ。）

以上、回収率は小・中学校ともに 5 割を切る結果となった。後述する学校関係者への聞き取り調査において、その理由について次の見解が寄せられた。調査の実施時期が年度末近くであったこと、調査が重要度の高いものであると学校教員に認識されなかった可能性があること、図画工作・美術科の担当教員が講師であったり、複数校を兼務していたりする教員である場合が少なくないという学校現場の実情が反映していると考えられること、などである。

2. 「地域資源を活用した美術活動」に対する考え方

(1) 小学校の状況

小学校対象のアンケートにおいて、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性を感じているかどうかをたずねたところ、「まあまあ必要性を感じている」が 26 校 (47.3%) と最も多く、続いて「よく分からない」が 13 校 (23.6%)、「必要性をあまり感じていない」が 9 校 (16.4%)、「特に必要性を感じている」が 7 校 (12.7%)、「必要性を全く感じていない」が 0 校 (0.0%) という結果であった (図 1 参照)。

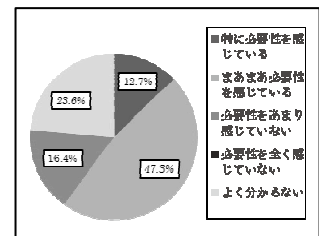


図 1 「活動実施の必要感(小学校)」

加えて、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性をなぜ感じているのか、その具体的な理由について自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。(自由記述の回答内容を示す場合、基本的に原文ママで記載しているが、美術作家以外の個人名や特定の学校名が挙げられている場合は、記号化するなどして特定されないように記載した。以下同じ。)

- ・授業時数の減少とともに画一化された題材が取り扱われ、学習から「地域の特性」が失われている。地域の特性を生かすことで造形、表現活動でより活性化、生活化されてくると思われる。 / 地域の良さを知り特色ある教育活動をしていくため。
- ・本校は、とんどの一つとして行われている「一式かざり」や、板祐生さんの「版画」など、身近に美術文化があります。地域の伝統を知るためにも必要性を感じます。 / 郷土教育との結び付き、総合的学習との結び付きに広がりが出ると思うから。 / 地域に有名な作家がおられる(辻晋堂)。
- ・本校では、地域の教材化(地域の自然・歴史・文化等)を図り、研究を全校体制で推進しているから。
- ・身近にすてきな素材があるのに生かさなないのはもったいないと思うから。 / もっと子どもたちに地域素材のすばらしさにふれてほしいと思うから。
- ・子どもたちの学習に効果的であり、地域を知ることにもなる。 / 地域資源の中に美術活動に生かせる題材がたくさんあると思うから。
- ・学校教育には地域の方の協力が必要です。美術活動にも地域資源を取り入れることができれば技能面だけでなくコミュニケーション力、地域を好きになるなどの効果が期待できるからです。 / 学校の特色が出るから。改めて地域の良さを実感できる。 / 児童が地域のことを知るチャンスだから。
- ・題材を選択する際に、身近なところから選ぶということは、必要であると考えます。また身近なところにある題材をふだんから積極的に見つけようという姿勢を持つことにつながるのではないかと思います。 / 中学校・高等学校から「美術」と「地域」のつながりについて考えることができるから。
- ・人的資源…児童に本物の芸術を見せることができ、表現力鑑賞能力を高めることができると思われるから。地域資源…創造力を培うには、身近な自然、芸術などから、デザイン、色、動きなどの面白さ、美しさに気づくことができる指導が必要だと考えるから。
- ・地域にいらっしゃるアーティストの方やその作品との出会い・かわり、児童の美術への興味につながったり、作品の見方を広げたりすると思うから。
- ・本校では、ふるさと教育に積極的に取り組んでおり、地域の方や地域の物を使った活動をしているため。
- ・児童にとって地域の良さや特徴に気付くきっかけになることも考えられるから。 / 地域資源を活用すると教育活動が豊かになると思うから
- ・市教委の方針として「ふるさとを思い…」というキーワードが入っており、地域に密着した教育内容の方向性が示されている。大いに共感する部分があり、図工科でも可能な範囲で取り入れるべきだと考えている。 / 郷土を愛する心を育てるために、地域を題材とした学習も大切だと思うから。
- ・地域には豊かな自然や独自の地域素材があり、子供たちが慣れ親しんだ素材にしっかりとひたしながら造形活動を楽しんだり、地域におられる作家の方に絵画指導をいただいたりして、美術活動の充実を図るため。 / 地域を大切に、故郷を大切に思う心を育てることにとっても有効だから。
- ・生活科や総合的な学習と関連させた作品をつくることがある。地域と密着した題材であるため。 / 地域を身近なものにしてほしいから。
- ・題材や素材への関心度度がその後の制作意欲、集中力に大きくかかわってくるので、地域の身近な素材、題材を活用したい。
- ・資源を活用することは、物を大切にすることに繋がります、また創造性も豊かにすることになるから。 / 伝統的な技術や作品づくりが必要だと思うから。
- ・地域の伝統行事、すてきな場所等、題材を選んで描くことでより地域の大切さを感じることができる。
- ・本校の特徴として、ベースとなる「地域」がないため、郷土愛、愛校心が薄く、地域の特徴を知らない子どもが多い。地域資源を素材に活用したり地域の伝統技能にふれて、少しずつ鳥取県または自分が住んでいる地域の良さを感知させたい。
- ・学校全体で、総合的な学習の時間、生活科の学習を中心に地域とのつながりを大切にした学習を研究主題の一つにもしている。図画工作でも地域資源を活用した方がよいと思う。 / 図工科のみならず、地域資源を活用した学習を展開することに郷土愛が醸成できると考えるから。

一方、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性をなぜ感じていないのか、その具体的な理由について自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

- ・「地域資源」と聞いて、ぱっと思いつくものがなく、今まで特に意識せず必要性も感じていませんでした。何を「地域資源」とするのかの認識がないのだと思います。下の設問を見て、それならば…と思うものがあつたので。 / 現在の年間指導計画の中では、特に必要性を感じてなかったから。
- ・〇〇市独自の地域資源(美術活動に結びつくもの)が、教科書の年計に沿った活動の中では、特に思いつかないため。
- ・現場がとても忙しい。地域に出たり、話を聞いたり…という校外学習が必要なことにあまり時間がさけない。図工の週時数を考えると、う…んとなってしまふ。 / 他に優先的な指導上の課題があるから。(例:基ソ的・基本的な知識・技能、学習への関心・意欲・態度)。
- ・活用して児童が意欲的に取り組めたらそれにこしたことはないが、現在「必要性」にかられているわけではないから。
- ・年間計画にそのような単元を組みこんでいないから。また、教育課程の伝達でも「地域資源を…」を学校として進んで取り組むように指示されていないから。また、教師が鳥取県の地域資源をどう活用しているか十分に知らないから。 / 教科書を主にしたいから。 / 時間的に難しい。

(2) 中学校の状況

中学校対象のアンケートにおいて、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性を感じているかどうかをたずねたところ、「まあまあ必要性を感じている」が20校(69.0%)と最も多く、続いて「特に必要性を感じている」が6校(20.7%)、「必要性をあまり感じていない」が2校(6.9%)、「必要性を全く感じていない」が1校(3.4%)、「よく分からない」が0校(0.0%)という結果であった(図2参照)。

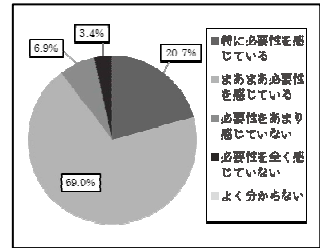


図2「活動実施の必要感(中学校)」

加えて、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性をなぜ感じているのか、その具体的な理由について自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

- ・実際に制作活動をされている方の作品(実物)をみたり制作意図などを聞いたりできる機会が持ちやすい。そのことによって作品制作の意欲や生涯学習にもつながるから。(市民の活動の広がりや継続にもつながる) /・地域の理解、郷土愛、ふるさとを大切に思う気持ちを養うことは必要だと考えます。
- ・生徒が身近な美術文化と触れ合うことで、地域の美術や文化に興味を一増持たせることができるのではないかなと思うから。
- ・社会のグローバル化にとまぬい、世界に対して、日本や地域の特色・文化を発信する力の育成が求められるから。
- ・国際化社会の中での美術や、地域に生きる人を人材として、郷土の美術は必要と考えています。 /・子ども達に自分の地域に誇りを持ってもらうため。
- ・地域にある美術的価値のあるものについて知り、関心をもったり、視野を広げるのはよいことと思う。
- ・そのような活動を行うことで地域のことに深く知り、少しでもより愛着がもてると思うから。また身近なものに対しては、興味関心が高まりやすい場合もあるから。 /・近隣の美術館の利用(これも地域資源として捉えるならです)の促進。 /・子どもたちに地域の良さを理解させたいから。
- ・地域創生ということが言われている。特に鳥取のような地方都市にあつては自分の住んでいる土地に根ざしたものに目を向ける必要があると感じているから。 /・生徒の目を地域の良さに向けさせることができるから、地域にあるものは活用すべきだと思うから。
- ・せっかくのすぐれた素材や題材、技的なことがらを知らないまま(触れないまま)ではもったいない。地元のものであることで親近感があり、そこをきっかけとして学べる。 /・本物に触れる機会となる作品や、人物との関わりの中で、感じるものを広げたい。
- ・地域の良さ、すばらしさを知ることは大切だし、また、地域の方とつながることも大切である。 /・美術をより身近に感じさせるのに有効だから。
- ・地域には、美術的価値をされている方がおられる。また、県を見ても美術史に残る活躍をした作家がいるため。
- ・人・物ともに身近にあると活用しやすいから。県博との連携など高い専門性に支えられた活動が可能になるから。
- ・地域を知り、誇りを持ってほしい。身近なことや美しさに興味をもって、気づけるようになってほしい。
- ・地域資源を活用することによって地域の良さや価値に気づき、地元への誇りや愛着がわくから。 /・因州和紙の歴史について。特質について。
- ・次世代を担う子どもたちに地域のよさを理解したり、見直したりして欲しいから、地域の活性化を考える一要素として。
- ・まずは自分の住んでいる町の作家や地域に伝わる芸術を取り上げ、目を向けることが必要。そこに興味関心を持たない限り、他への見解や知見を広げるとは難しいと考える。 /・学習指導要領に地域の文化財などを積極的に活用し、とあるから。
- ・世界的に名の出ている作家や作品は、見聞したことがあつても、自分の住む地域の作家については、ほとんど知らないという状況があるために、紹介する必要がある。 /・その地域ならではのものは画一化されがちな生活に色をつけてくれると思う。

一方、学校で「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要性をなぜ感じていないのか、その具体的な理由について自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

- ・地域との結びつきのある授業は、必要であると思うが、今現在、美術科での必要性を感じない。
- ・地域資源となるような作家がいない。地域に根差した学習なら、小学校の総合的な学習の時間で取り上げて学習しているから。
- ・現任校にて、地域資源(陶芸)を活用した学習に、毎年取り組んでいるため。

以上、「鳥取の地域資源を活用した美術活動」を実施する必要感については、小学校では6割の回答者が、中学校では8割強の回答者が肯定的な見解を示す結果となった。その理由として、地域について学ぶ活動の一環として位置付けることができること（なかには学校全体で地域学習を積極的に行っている背景を持つものもある）、身近に活用できる地域資源が存在することや、それらを教材として取り上げること意義（郷土愛の育成や表現意欲の向上など）がある、といった回答が複数見受けられた。特に中学校からの回答では、国際化の流れを受けて地域の文化を学ぶことの重要性を指摘する声も複数あった。

一方、小・中学校ともに1割程度の回答者が否定的な見解を示した。その理由として、年間指導計画への位置づけが難しいことや、他に優先すべき指導課題が存在することが複数挙げられていた。

3. 授業実践の状況

(1) 小学校の状況

小学校対象のアンケートにおいて、回答者がこれまで学校現場において行った「鳥取の地域資源を活用した美術活動」の実践数をたずねたところ、「数回程度」が31校（56.4%）と最も多く、続いて「0回」が17校（30.9%）、「10数回程度」が4校（7.3%）、「20数回程度か、それ以上」が0校（0.0%）という結果であった。また、無回答のものが3校（5.5%）あった（図3参照）。

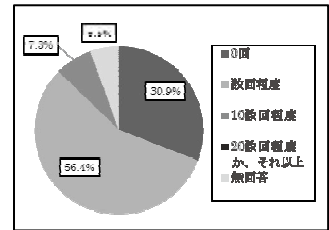


図3「活動の実践数（小学校）」

次に、回答者がこれまで行ってきた実践において、地域資源を題材として扱ったものとは一体どのような内容のものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいただいたところ、図4で示す結果となった。

加えて、選択した内容について、具体的に何をモチーフとして扱ったのかを自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

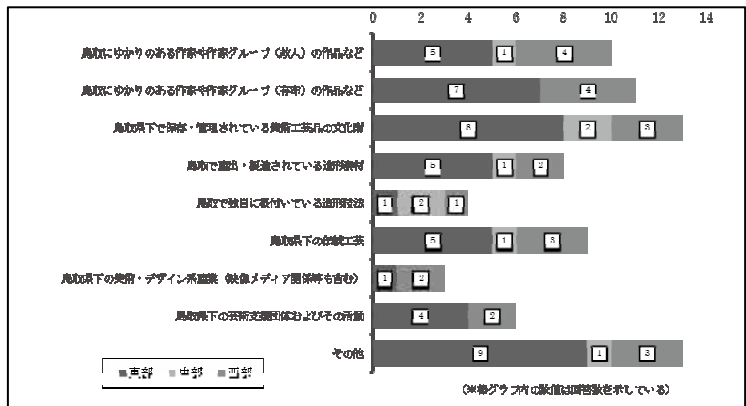


図4「実践内容の内訳（小学校）」

- 【鳥取にゆかりのある作家や作家グループ（故人）の作品や経歴、表現方法など】
- ・板垣生さん 多色刷り版画版 / ・彫刻家入江甲氏の作品の展示 / ・県立博物館で、作品の解説を聞いたことはある。 / ・絵画、墨絵
 - ・濱田台見…小学校（濱田台見出身校）の緞帳をもとに鑑賞、デザインの学習を行った。 / ・前田直衛顕彰会による児童共同制作やスケッチ講習会
 - ・県立博物館主催の出張美術館（名前は不確）鑑賞 / ・図工科ではないが、辻晋堂 / ・前田寛治、伊谷賢蔵 / ・鳥取県立美術館見学（H22）
- 【鳥取にゆかりのある作家や作家グループ（存命）の作品や経歴、表現方法など】
- ・水木しげる氏の妖怪の絵をモチーフにしたことが何度かある。 / ・地域にいらっしゃる画家にお願いして絵画教室を行う
 - ・徳持耕一郎（鉄筋彫刻家）…針金を使った工作指導、鑑賞（視点をかえるとどのように見えるか）（作品を展示する場所をかえるとどのように見えるか）の指

- ・ 導。山根貴裕…技能(彩色, スケッチなど), 表現方法指導 / 作家の方と一緒に牛の絵を描いた。 / 書…(柴山さん)。前田寛治。
- ・ 県立博物館とタイアップして、「フナイタケヒコ展」の鑑賞後, フナイさんに登場していただき, 話をしていただいた。→その後, 学校に来校していただき, 授業をしていただいた。細川佳成さんに作品を紹介していただき, 5年生の児童が作品で使った同じ技法を体験させてもらった。
- ・ 植田正治写真美術館。生田さん(版画)。光のページェント?写真教育。弓浜かすり。
- ・ 島大藤田教授を招いて講演(鳥大出身、二部小卒生)・地域在住の作家の方に, 子どもたちの作品を見ていただき, 指導をいただいたり, 絵画クラブ活動(児童)をもち, 絵に表す活動を楽しんだりした。 / 白磁, 前田さんの展覧会に行き, ご本人にお話をいただいた後, 鑑賞の授業を行った。
- ・ 前田昭博さん。八東町陶芸グループ。墨絵(安住さん)。焼き絵(安住さん)。澤田直見さん。ちーず(切り絵。よみきかせとタイアップで)

【鳥取県下で保存・管理されている美術工芸品の文化財(建築物や史跡等も含む)】

- ・ 鑑賞としてならば / 若桜たくみの館で鑑賞および工作体験 / 文化財ではないが, 学校周辺の神社・仏閣等
- ・ 神社 / 米子市立美術館の見学 / 学校近隣の寺社のスケッチ / 久松公園, 仁風閣 / 校区内の神社の写生
- ・ 古民家 神社お寺の絵 / 麒麟獅子, 神社仏閣 / 国府町宇倍神社の風景画。用瀬町ながしびなの館の風景画。
- ・ 投入堂。豊乗寺の絹本着色普賢菩薩像(レプリカで)。住職が保護者だったので話を聞かせてもらった。 / 仁風閣, 神社

【鳥取で産出・製造されている造形素材】

- ・ 建築材(廃材)からの造形 / 鳥取杉の廃材をつかい, 木工作品を作った / わらや和紙を使った表現活動
- ・ 境港市には木材加工をする工場が集まった木工団地があり, そこで出た廃木材を利用した木工作品の制作(題材名:くぎうちトントン)
- ・ 題材は覚えていませんが, 和紙を使って作品を作りました / 和紙, かずら / 巣箱作り

【鳥取で独自に根付いている造形技法】

- ・ 因州和紙の紙すき体験に参加(親子会を兼ねて), 正月飾り作り, 折り紙(和紙)でコサージュづくり(6年生への卒業の花作りとして4, 5年に)
- ・ 中部地区は版画 / たたら製鉄, 一色飾り / 版画

【鳥取県下の伝統工芸】

- ・ 法勝寺一式飾り / 焼きもの / 青谷の和紙をつかい, ちぎり絵 / 鹿野の布ぞうり, 酒津のトンドウ(3年の総合)
- ・ 紙すき, 和紙を使っの造形活動 / 青谷に行って和紙作りを見学したあと自分たちでも和紙を作ってみる
- ・ 焼き物 / 陶芸 / まげわっぱ。かずらあみ。たちごま。かざりごま。紙すき etc

【鳥取県下の美術・デザイン系産業(映像メディア関係等も含む)】

- ・ 和太鼓づくり / 陶芸 / 植田正治写真美術館ワークショップ参加

【鳥取県下の芸術支援団体およびその活動】

- ・ 鳥取大学の教授をまねいての造形活動 / 鳥の劇場…鑑賞 / 鳥の劇場など / 貝殻節の団体 / きりん獅子舞
- ・ 学習発表会後の講師を招いての活動(写真・ゴスペル・ダンス)

【その他】

- ・ 牧谷のかきつばた群落, 田後魚港の魚般等の写生, 風景画 / 鳥取の自然 大山, 日本海などの風景等 / 桃作り
- ・ アートカード(地域にある立体活動・オブジェなど)を使った鑑賞 / 地域の産業 農業を行う様子 漁業 船, 港の絵
- ・ 芸術体験として, 小グループにわかれて, 書道(アートのなじみ、ぼかしを多様)や切り絵などの美術活動を4, 5, 6年が行った。
- ・ 題材選びを地域に求める。牛, 竹の子ほり, 田植え, 稲刈り, ぶどうの収穫, 神社, 等
- ・ 地域の造形素材。廃材を使っのチェーンソーアート。実際の作品作りを鑑賞
- ・ 地域の文化遺産等を活用した写生会など / こて絵をクラブ活動で行った。(図工ではない) 図工では周囲の写生を行った
- ・ アンケートの主旨とはずれるかもしれませんが, 絵画の題材としての鳥取砂丘, 麒麟獅子舞/造形遊びとしての鳥取砂丘
- ・ 田植え体験を行い, その時の様子を絵に表した。樹齢400年の有楽椿。大イチョウ。
- ・ 銭絵…クラブ活動で伯耆銭絵クラブの皆さんを講師に作品を製作。銭絵展(花回廊)に出品した。

さらに、回答者がこれまで行ってきた実践は、どのような方とともに行ったものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいただいたところ、図5で示す結果となった。なお、「その他」の具体的な内容として、「鳥大教授」、「学校の主事さんに教えてもらった」、「工房の方と共同で行った」、「地域の人」と記載されていた。

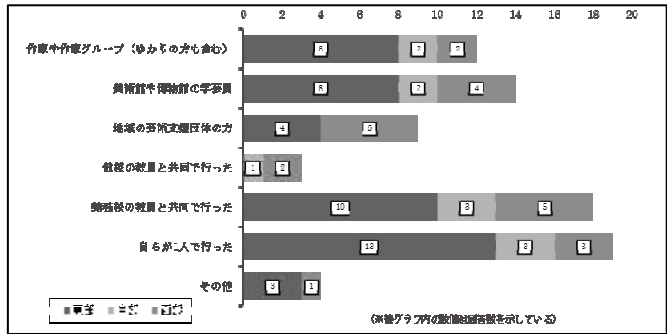


図5 「実践の協力者の状況 (小学校)」

また、回答者がこれまで行ってきた実践は、どのような学習活動の内容で行ったものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいただいたところ、図6で示す結果となった。

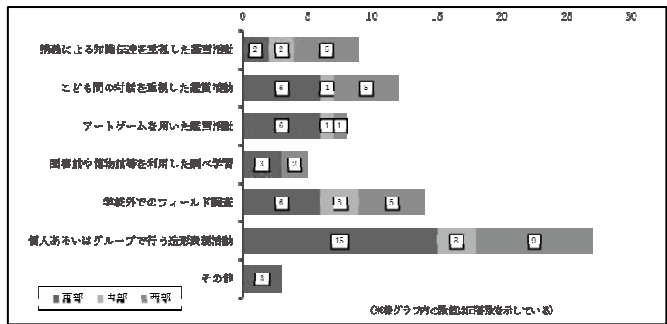


図6 「実践の学習活動の内容 (小学校)」

最後に、回答者がこれまで行ってきた実践のなかで、特に印象深く記憶に残っている事例について、自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

- ・本校の児童が祐生記念館に足を運び、見学させていただくことになっております。(来月2月)また、一式飾りについても調べ学習を行っていく予定です。(社会科等と関連させて) / ・作家ご本人に、作品の印象、好きな理由等を子供が発表し、その後、ご本人にコメントや作品の思いをお聞きしたこと。
- ・地域の方と、布ゾウリや正月飾り(わらをあむ)などを体験。自分の指と自然素材で物が作れることに子ども達がとても喜んでいました。達成感もあったのかも。 / ・鳥取砂丘での造形遊び スケールの大きな対象を相手にランドアートの活動が実践できた。 / ・和紙を使ったちぎり絵
- ・博物館の学芸員さんに指導をしていただき、博物館に展示されている油絵を見ながら、子どもたちがイメージを伝え合い鑑賞活動をしたことが印象に残っています。 / ・県立博物館の学芸員と、博物館所有の郷土ゆかりの作家の作品を鑑賞し、アートゲームなどを行った上で簡単な模写を行った。
- ・チェーンソーアートの作品作りの鑑賞 児童の前で実際に作ってもらったり、自然や木のすばらしさについて語ってもらったりしたこと。ゲストティーチャーが保護者だったので、地域に対する親しみが増したと思う。 / ・以前は地域独特の「絵」がありました。今は出品されなくなっています。
- ・樹齢400年以上ある有楽椿(お寺の境内にある)を素材として、絵に表した。春、夏、秋と有楽椿を訪ね、親しみ遊ぶ活動を組み、「心に残った有楽椿の思い出」を様々な技法を用いて、絵に表した。所有されている住職さんにもお話を伺った。(子どもたちに話してもらおう) / ・版画での表現：麒麟獅子舞
- ・5年生の森林をテーマにした学習。図工だけでなく、社会、総合、家庭科などと科科で。Ex. まげわっぱ→図：製作 社：第一次産業 総：販売ルートの聞き取り 弁当→家：弁当 総：地域おこし、販売 図：表紙デザインなど。たくさんしました。 / ・農作業を題材とした作品作り

(2) 中学校の状況

中学校対象のアンケートにおいて、回答者がこれまで学校現場において行った「鳥取の地域資源を活用した美術活動」の実践数をたずねたところ、「数回程度」が19校（76.0%）と最も多く、続いて「10回程度」が4校（16.0%）、「0回」が4校（8.0%）、「20数回程度か、それ以上」が0校（0.0%）という結果であった（図7参照）。

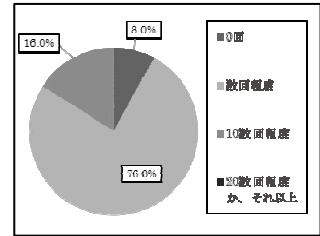


図7「活動の実践数（中学校）」

次に、回答者がこれまで行ってきた実践において、地域資源を題材として扱ったものとは一体どのような内容のものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいただいたところ、図8で示す結果となった。

加えて、選択した内容について、具体的に何をモチーフとして扱ったのかを自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

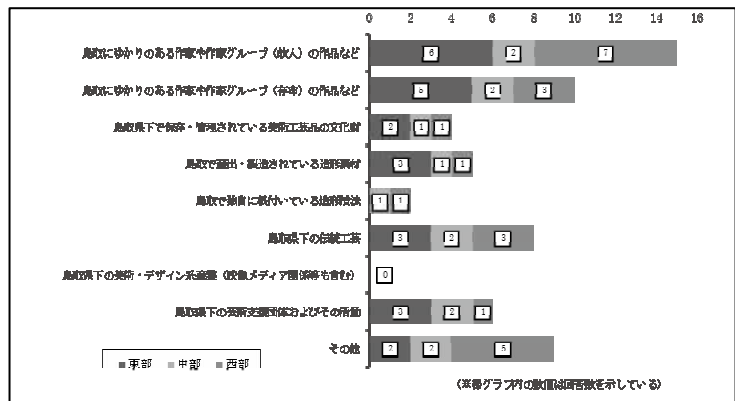


図8「実践内容の内訳（中学校）」

【鳥取にゆかりのある作家や作家グループ（故人）の作品や経歴、表現方法など】

- ・県博から借りた前田寛治のバズルや自作資料など。倉吉博物館（桑野博利展2013）。 / ・鑑賞。水墨画(文字も含む) / ・版画(板ゆうせい)
- ・前田寛治の作品による鑑賞の授業 / ・県博所蔵の作品コピー。油絵、写真等。博学連携。 / ・辻晋堂、山本兼文 / ・辻さんの鑑賞の授業
- ・地元美術館・博物館・公民館で行われる展覧会鑑賞 / ・旧船岡町(現八頭町)出身の橋本興家氏(版画)の作品等
- ・県博の出張美術館。学芸員が来校し説明してくださった。絵画3点。 / ・辻晋堂 / ・植田正治、辻晋堂、地域に設置されている野外彫刻
- ・植田正治について、国頭繁次郎について / ・香田勝太、植田正治、小早川秋聲、辻晋堂。いずれも「美術資料」(県版)に載っている程度の紹介。

【鳥取にゆかりのある作家や作家グループ（存命）の作品や経歴、表現方法など】

- ・大阪弘道展2014。あと、何かの展示の時に南場兄一さん(北栄町在住)を作品の前で質問するような時間など他にもあと数回。県内のパブリックアートカルタづくり。 / ・県博所蔵の作品コピー。油絵、写真等。博学連携。 / ・地元美術館・博物館・公民館で行われる展覧会鑑賞
- ・彫刻ロードの紹介、抽象彫刻について、主に鑑賞活動 / ・県博に生徒をつれていき、実際の作品をみながら鑑賞授業、学芸員説明。大久保さんの作品。
- ・徳持耕一郎さん。針金を使った表現。県立博物館美術振興課との連携事業『アーティストとつくろう』。 / ・鑑賞
- ・(学校創立)30周年記念式典で作品を寄贈していただいた作家(角護さん)に講演会をしていただいた
- ・井田勝己(※米子彫刻シンポジウムの作品や取り組みを簡単に話す(教員サイド)) / ・校外学習による陶芸体験

【鳥取県下で保存・管理されている美術工芸品の文化財（建築物や史跡等も含む）】

- ・在校している学校の地域のパブリックアート作品を生徒がそれぞれ撮影して紹介した / ・山本兼文の作品群
- ・夏休みを利用したパブリックアートのレポート提出 / ・美術部の活動で、仁風閣のスケッチ会を行ったり、県立博物館で美術館紹介を行った

【鳥取で産出・製造されている造形素材】

- ・竹細工クラブ(関金)の方に外部講師として来校していただき、指導(3年目くらいです) / ・青谷因州和紙
- ・因州和紙を用いて面づくり。ランプ・シェード制作 / ・青谷の和紙を使用したランプシェード、ねぶた

・青谷の和紙【鳥取で独自に根付いている造形技法】 / 一式飾り(法勝寺) / 竹細工

【鳥取県下の伝統工芸】

・校区の陶芸作家の指導のもと、陶芸作品づくり / すげ笠づくり / 牛ノ戸焼

・和傘の教材化を試みましたが、実現しませんでした。 / 因州和紙を使用して水墨画 / 弓浜緋の紹介 / 陶芸

【鳥取県下の美術・デザイン系産業 (映像メディア関係等も含む)】

※回答なし

【鳥取県下の芸術支援団体およびその活動】

・鳥の劇場に演技指導(総合的な学習の時間) / 県立博物館と連携した授業の実施 / 県立博物館との連携授業

・アトリエku(たまいつかさ自由教室)の作品展の紹介(出品者がいたのでポスターを掲示した)

・鳥取博物館から派遣される学芸員もしくはワークショップ / 博物館学芸員の講話

【その他】

・倉吉博物館で行われた土器(?)の展覧会など、できるだけ特別展には鑑賞(学芸員さんと相談して)行くようにしている

・米子市に伝わる話をもとに絵本の製作 / 地域の特産物のパッケージデザイン / 県博の学芸員とのワークショップ(H25年度実施)

・境港では、交歓写生会で公共マリーナ周辺の風景画を市内の美術部員が集まって写生会を行っている。西部地区では、鳥取花回廊で美術部員が集まって交歓美術教室を行っている。 / 夏休みや、冬休みの課題として美術館へ行って作品をみる鑑賞は毎年行っている。

・鳥取県の特産品から発想 鳥取県の特産品(二十世紀梨、砂丘らっきょう、松葉がに)から発想してお菓子のパッケージデザインを考える / 漫画

・地域を取り入れた作品(和菓子のデザインに地域性を取り入れる)など

さらに、回答者がこれまで行ってきた実践は、どのような方とともに行ったものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいたところ、図9で示す結果となった。

また、回答者がこれまで行ってきた実践は、どのような学習活動の内容で行ったものであったのか、選択肢のなかではまるものを全て選んでいたところ、図10で示す結果となった。なお、「その他」の具体的な内容として、「部活ですが、アニメーションのワークショップに参加しました」、「制作」と記載されていた。

最後に、回答者がこれまで行ってきた実践のなかで、特に印象深く記憶に残っている事例について、自由記述で答えていただいたところ、以下のものが挙げられていた。

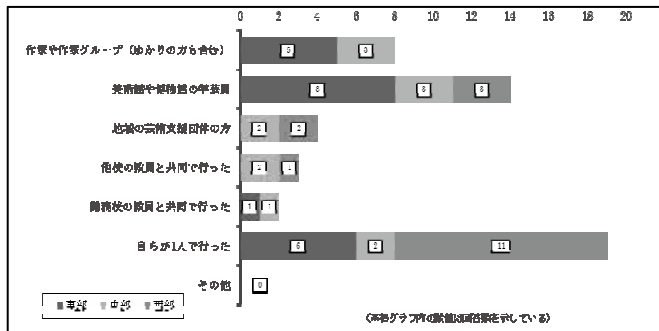


図9 「実践の協力者の状況 (中学校)」

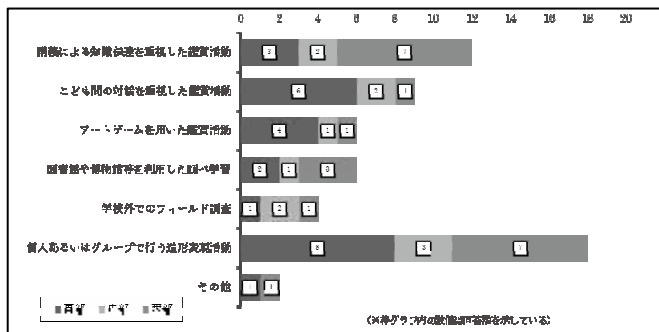


図10 「実践の学習活動の内容 (中学校)」

- ・竹細工は、ここ数年やっていますが、生徒も講師もとても喜んでいる。なかなか自宅ではやりにくいことになっているので、ぜひ続けたい。県博の作品を实物大にして、それを分割してパズルのようにした自作教材は、一枚の絵をとでもじっくり見ることのできた時間で印象深い。
- ・〇〇小の流木を使った工作を参観しました。身近なゴミ?!と思われていたものが、県外ではアートに使われているのが、郷土の資源を使った授業づくりについて考えるきっかけでした。 / 地域の素材をもとに制作活動をしている作家をゲストティーチャーにむかえて行った授業
- ・鳥取砂丘でひろったライターを使って造形作品を作られていた。(大久保さんの作品) / 美術館に行き、学芸員さんによる作品説明、知識伝達の鑑賞活動
- ・地域の保存会の方に来ていただいて作ったすげ笠。地元作家の作品を博物館と連携して対話型鑑賞用に展示企画から考えて実践した鑑賞。
- ・智頭杉の間伐材を活用した工芸 自分の実践ではないが大学生の時に受講した。木目の美しさやぬくもりなど、作品作りを通して素材の良さを感じることができた。 / 鳥取駅前周辺、アート作品散策、ウォークラリー、山本兼文作品展

以上、「鳥取の地域資源を活用した美術活動」は、小学校では6割以上の回答者が、中学校では9割以上の回答者が、少なくとも1回以上は実践を行っていた。

実践において地域資源の何を扱ったかについては、「鳥取県下で保存・管理されている美術工芸品の文化財」の項目で小学校と中学校の間で特に大きな差が見られ、前者で多く選択され、後者で少ない結果が示された。その理由は、具体的に何を扱ったかを記した回答を見ると、小学校では身近にある神社・仏閣等を風景写生のモチーフとしていることが背景にあることが分かる。「鳥取にゆかりのある作家や作家グループの作品など」は、その方が故人であるか存命であるかを問わず、小・中学校ともに選択される数が多い項目であった。具体的に何を扱ったかを記した回答を見ると、小・中学校ともに前田寛治や植田正治、辻晋堂といった日本美術史上でその名の知られた作家名が挙げられている一方、地元で活躍する作家の名前を挙げる回答も少なくなかった。それに比して、地域特有の造形素材や技法は選択される数が少ない項目であったが、具体的に何を扱ったかを記した回答を見ると、和紙(因州・青谷)を挙げる声の小・中学校ともに複数見受けられた。県下の芸術支援団体についても選択される数が少ない項目であったが、具体的に何を扱ったかを記した回答を見ると、鳥の劇場(特に小学校)や鳥取県立博物館(特に中学校)との連携を挙げていることが特徴的であった。なお、「その他」を選択した方について、具体的に何を扱ったかを記した回答を見ると、小学校では、身近な生活空間に存在するものを風景写生などのモチーフとして扱っていること、中学校では、郷土の特産物をデザイン教育のなかで扱っていることを例に挙げる方が複数おられ、学校現場における“地域資源を活用した美術活動”の範疇の広さが理解される。

実践の協力者の状況を見ると、「自らが一人で行った」の項目が最も多く選択されていたのは小・中学校で変わらないが、「勤務校の教員と共同で行った」の項目では大きく差が開いた。クラス担任制を基本とする小学校と、教科担任制を基本とする中学校という校種の違いが背景にあると考えられる。実践の学習活動の内容を見ると、「個人あるいはグループで行う造形表現活動」の項目が最も多く選択されていたのは小・中学校で共通しているが、小学校では「学校外でのフィールド調査」の項目が、中学校では「講義による知識伝達を重視した鑑賞活動」の項目がそれぞれ多く選択されているのが特徴的である。なお、印象深く記憶に残っている実践事例については、博物館学芸員のレクチャーや美術作家との交流、屋外でのダイナミックな造形活動などが挙げられており、こうした非日常的で直接的な体験が、児童生徒のみならず教師にも好影響を与えている様子を伺い知ることができる。

IV. 学校関係者への聞き取り調査の結果

平成27年5月21日に鳥取県小学校教育研究会図画工作部会の役員の先生方（以下、「図工部会」と記す）より、平成27年6月19日に鳥取県中学校教育研究会美術部会の役員の先生方（以下、「美術部会」と記す）より、地域資源を活用した教育実践に関するアンケート調査の結果についてご意見を伺ったところ、次の内容のコメントをいただいた。

第1に、地域とつながる機会の教育課程における位置づけについてである。図工部会からは、昔は畜産や漁村の風景を描くなど図工科での地域との関わりがあったが、今は教科書の題材を迫るのが精一杯である。地域の活用自体はどここの学校も取り組んでいると思うが、社会科や総合的な学習の時間辺りでつながりをつくっていくことが多い。小学校は、学校経営そのものが地域に根差しているという考え方が強いので、様々な面で地域との連携を図ろうとするし、必要性も感じている、といったコメントをいただいた。また美術部会からは、こどもの立場で言うとほとんど知らないような土地の資源、歴史や伝統的なものについて、地域の方も交えながら紹介するという取り組みは、都市部の学校に比べて規模の小さい地域に密着した学校の方からよく聞く。教科を超えたところで実践を入れていくことは必要であろうし、可能でもあると思うが、美術科の中で時間を取って行うのは難しい、といったコメントをいただいた。

第2に、地域資源の活用についての現状と課題についてである。図工部会からは、地域の美術作家を紹介していただいても、時間的な余裕がなかったり、必要な費用やスタッフを思うと踏み切れなかったりする。最近の傾向としては、美術館や博物館の方に指導や支援をいただくというケースが鳥取県内では増えてきている。出前講座という形で、予算も付くので活用しやすい、といったコメントをいただいた。また美術部会からは、例えば近くに美術館があるなどすれば活用したりすることも考えられるが、(立地条件として)外に出にくい学校もある。地域に有名な作家やグループ、伝統工芸的なものもない場合、地域の素材を、と言われても難しい。夏休みに博物館の鑑賞や市内のパブリックアート探しをしてレポートにまとめなさい、といった設定はできるかも知れないが、それ以上は踏み込めない。一方、市内の地域に何か掘り下げてみたいものがあり、生徒が自分の住む地域を知り、盛り上げようとする取り組みができることもある、といったコメントをいただいた。

第3に、学校内での地域題材の継承や開発における困難さについてである。図工部会からは、「麒麟獅子を描く」など伝統的に地域とつながっている題材、先人達が開発してこられて、そのつながりを受け継ぐ地域の題材はあると思う。ゆとりがあれば地域に目が向きやすくなるかもしれないが、1人の教員や1つの学校が単独で取り組むのは難しい、といったコメントをいただいた。また美術部会からは、美術科教員が皆共通して扱う基礎的な部分がありつつ、各自が地域性に合わせて独自に取り組むものもある。時間数に限りがあるので1学期に1~2つできればよいが、掘り下げていける状況になるかはまちまちである、といったコメントをいただいた。

以上、アンケート調査結果に対する学校関係者へのヒアリングにより、各学校の教育課程上の位置づけや校区内での地域資源の状況、マンパワーによる教材開発～教育実践の限界などが、地域の美術を教材として扱う際のハードルとなっている実態について確認することができた。

V. まとめ

OECDが2013年に行った、中学校及び中等教育学校に所属する教員を対象とした学習環境、勤務環境に関する調査によると、我が国の教員の勤務時間は調査参加国のなかで最長という結果であった(一般的な事務業務や、課外活動の指導に割かれる時間が極めて多い)⁷。本研究は、小学校の教

員も調査対象として含むものであるが、同様に極めて多忙な状況であることは、本研究の調査結果にも表れている。また、今回のアンケート調査の回答においては、過去に地域資源を活用した美術活動を行った経験のある鳥取の教員は少なくなかったが、その実践は教員自らが1人で行ったものであるケースも同様に少なくなかった。一方で、インタビュー調査においては、身近に取り上げやすい地域資源が存在するかどうかは各学校の立地条件によって違いがあるなど、教員が個人で独自に教材開発を行うのは難しい面もあることも明らかとなった。したがって、地域資源が十分に活用されていくためには、同じ職場内の教員や、近隣地域の他校の教員と地域資源に関する情報の共有化が図られることが重要となると考えられる。加えて、世代交代が進む学校現場においては、過去に取り組まれた実践の内容、その成果と課題を次の世代の教員に伝えていく機会の充実も望まれる。教育行政や各種教育団体が主催する教員研修などはその1つとなると考えられるが、矢継ぎ早に提示されていく教育改革への対応などに追われている現実がある。

ただし、こうした地域資源を活用した美術活動を行うには困難な状況がある一方で、実践化には潜在的なニーズがあることも調査結果から読み取ることができる。実践の必要性を感じる理由を示す声からは、身近な地域資源の存在を知る教員にとって、子ども達にもその良さを味わって欲しいと願い、教材として取り上げたいと望むのは、自然に起こる感覚であることも理解される。学校全体の教育課程のなかで地域学習に関わる内容が明確に位置づけられ、そのなかで美術活動が果たすことのできる役割が広く理解されたならば、状況は異なる様相を見せていく可能性がある。

折しも現在、中央教育審議会では次期学習指導要領改訂に向けた動きのなかで、「開かれた教育課程」という考え方のもと、新しい学校像が議論されている。整理された論点には、「学校が社会や地域とのつながりを意識する中で、社会の中の学校であるためには、教育課程もまた社会とのつながりを大切にする必要がある」といった文言が記されている⁸。地域全体で子どもを育てるために、今後、学校はさらに積極的に地域と関わり、人的・物的資源の存在を知り、それらを活用していくカリキュラム・マネジメントを行うことが期待される。その際、地域資源に関わる知識や技能と、子どもの資質や能力を、どのような学習活動によって関係付けるのか整理する必要もあるだろう⁹。同時に、地域の側からのアプローチも重要である。今回の調査結果からは、鳥取県立博物館や鳥の劇場など、豊かな文化資源を有する施設・団体がアウトリーチの活動を積極的に行っていたこと、鳥取県下で活躍されている美術作家が協力的に学校と関わっていたことが、地域資源を活用した美術活動を進める上で非常に重要な役割を果たしていたことが分かる。それらが一時的で局所的な取り組みではなく、恒常的で全体的な取り組みとなっていくためには、やはりカリキュラム・マネジメントがキーとなるであろう。地方行政側も、地域を活性化する方略の1つとして捉え、全面的にバックアップしていくことが望まれる。

謝辞

平成26年度に行ったアンケート調査にご協力いただいた鳥取県下の小・中学校の先生方、平成27年度に行った聞き取り調査にご協力いただいた鳥取県小学校教育研究会図画工作部会及び鳥取県中学校教育研究会美術部会の役員の先生方におかれましては、心より御礼を申し上げます。

また、平成26年度「地域資源を活用した美術活動による教員研修の実践研究」及び平成27年度「鳥取の美術文化に関する地域資源を活用した教材開発の実践的研究」は、鳥取大学地域学部附属芸術文化センター准教授の筒井宏樹先生、鳥取県立博物館美術振興課主幹学芸員の三浦努先生、鳥

取県地域振興部文化政策課課長補佐の吉野知子先生にメンバーとして加わっていただき、日頃より多大なご支援をいただいております。ここに感謝の意を表します。

注

- 1 当該研究事業の全体的な概要は、右記の冊子に掲載されている。鳥取大学 地(知)の拠点整備推進室[COC整備推進室]編集 (2015)『文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(平成25年度採択)一知の発展的循環プロセスの構築による地域拠点整備事業— 地域志向教育研究事業 平成26年度 成果報告書』 pp.58-59
- 2 集計結果は冊子としてまとめ、武田信吾 (2016)『小・中学校対象「鳥取の地域資源を活用した美術活動」に関するアンケート調査 集計結果』 pp.1-36 として発行した。当該冊子は、平成26年度末に県下の全小・中学校に配布し、情報が学校現場と共有化できるようにした。
- 3 当該研究事業は、右記の冊子に紹介されている。鳥取大学 (2016)『平成27年度 鳥取大学地域貢献支援事業／大学開放推進事業 報告書[ダイジェスト版]』 p.1
- 4 紙幅の都合上、本稿では回答者が勤務する学校の所在地(回答数と回収率)のみを記載した。詳しくは、武田信吾 (2016)『小・中学校対象「鳥取の地域資源を活用した美術活動」に関するアンケート調査 集計結果』 pp.8-10 を参照のこと。
- 5 紙幅の都合上、教員研修についての質問については、本稿で扱わないこととした。詳しくは、前掲書 pp.23-24 を参照のこと。
- 6 中学校からいただいた回答の内、美術科教員が他校と兼務の為、回答を控える旨が記されたものが1通あった。この1通は、集計結果として回答数には含め、以降の設問は無回答であるため含めなかった。
- 7 国立教育政策研究所編集 (2014)『教員環境の国際比較—OECD 国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果報告書—』 明石書店 pp.174-175
- 8 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/kaisai/1369685.htm より (最終閲覧は平成28年6月8日)
- 9 勝野頼彦(研究代表者) (2014)『平成25年度 プロジェクト研究調査研究報告書 教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7 資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理 [改訂版]』 国立教育政策研究所 pp.38-39

(2016年6月3日受付, 2016年6月23日受理)